

杏実あんみから学まなんだこと

塩竈しおがま市立玉川たまがわ中学校二年
の
浅野あさの友希ゆき

私には、大好きないところがあります。いとこの名前は本堂杏実。生まれつき左手の五本の指が無い杏実は、子供の頃からラグビーやボクシングなどの様々なスポーツに挑戦し運動神経も抜群のスポーツウーマンです。

初めて杏実と会った時、指のない左手を見た私は、「杏実はどうして指がないの?」

と聞きました。すると杏実は、

「私ね、お母さんのお腹の中で、左手をケガしちゃったんだ。」

と、笑って話したのです。私達のすぐそばでやりとりを見ていた母達は、一瞬驚いた顔をしましたが、杏実の言葉にすぐに笑顔になりました。

ある年の夏、杏実を含む親戚数人で、シヨッピングモールに買物に出かけることになりました。太陽の強い日差しが照りつけ、身体中に汗がにじみ出るような暑さに、私は外出する前から気が滅入っていました。ところが、杏実は、暑

い日にもかかわらず、腕全体を覆い隠すような袖の長い上着を着ていたのです。

私が驚いていると、一緒にいた私の母が、杏実に話しかけました。

「指が気になるの?」

杏実は、一瞬、間をおいてから

「私は、もう慣れたから気にしないんだけど私の左手を見た周りの人が気にするみたい。聞きとれる声で、〃気もち悪い〃って言ったりする人もいるし、見ちゃいけないものを見たって困った顔をする人もいる。だから、できる限り左手を隠すようにしてる。」

と答えたのです。

私は驚くと同時にとまどいました。それは、自分自身ではどうしようもないことで、障害を馬鹿にし、忌み嫌う世の中に。何よりも、そう話した杏実に何も言えなかった自分自身に腹が立ったからです。

結局、買物の間中、杏実の左手は、長袖の中から出されることはありませんでした。

この日のことは、私自身に、勝手に障害者の気持ちをおわかったような気ではなかったか。無知なことで知らないうちに誰かを傷つけていたかもしれない、と考えさせられるキツカケになったのです。

それからしばらくして、杏実は通学先の大学の先生の薦めで、パラアルペンスキーに挑戦することになりました。片手一本でストックをにぎり、雪の斜面を滑走する、スピード、技術が求められる競技です。

当初、障害者としてスポーツをすることに抵抗を感じていた杏実でしたが、与えられたチャンスを大切にし、新しい分野にチャレンジすることを決めました。

常に悩み、時には傷つきながらも、自分自身を受け入れ乗り越えていく。努力を続けた杏実は、平昌パラリンピックの代表選手に選ばれ、入賞したのです。

今年の始め、杏実は足を負傷し、手術をしました。結果、筋力と体力が低下し、現在リハビリに励んでいます。来年開催される北京パラリンピックの出場枠を獲得するため、「目の前にあることに全力で取り組むだけ。」

そう言って笑う杏実は、今日も困難から目をそらさず、努力を続けています。

周りの人と違う気持ち

美馬市立岩倉中学校二年
笠井友斗

僕は、生まれつき手に障がいがあつて、周りの人と少し違った生活をしています。今、僕の周りのクラスメイトや先輩たちは、ありのままの僕を受け入れてくれています。だから、これまで手のことでいじられたり、不快な言葉を投げかけられたり、いじめを受けたりすることは一回もありませんでした。しかし、学校以外の場所でこんなことがありました。

僕は前からスイミングスクールに通っています。ある日曜日の練習の日、いつも通り水着に着替えて練習が始まるのを待っていた時のことです。一人の友達が、

「この子、手の指が3本と4本なんですよ。」

と、僕の手のことを周りの子たちに広めていました。案の定、それに驚き、珍しがって、僕の周りに4、5人の子が寄つてきました。

突然、その中の一人が、

「なんで指が3本と4本なん？」

えられながら、工夫して身につけてきた自分なりの生活や、勉強のやり方があります。例えば、リコーダーは、押さえる指が違うので、周りの人に聞いても教えてもらえないというデメリットはありますが、今から新しい指づかいを覚えるのはとても大変だと思います。スポーツをしている時も、今まで自分に一番やりやすい方法でやってきたので、これから違う動きをしなければいけなくなると、苦労すると思います。

三つ目の理由は、「今までの苦労や体験が今の僕を作っている」ということに気付いたからです。先日の人権講演会で、僕はAさんに出会いました。Aさんは、「部落差別のことをたくさんの人に正しく知ってもらい、差別をなくす」ために活動しています。講演の中では、自分自身の苦しい体験や、お兄さんが受けた結婚差別について語ってくれました。その中で、Aさんの「違いがあつていいじゃないか」という言葉が、「誰にも差別されることなく、ありのままの自分を受け入れてくれているみんなと一緒に毎日生活している今、僕は十分幸せなんだ」ということに気付かされました。講演が終わった時、「自分もAさんのように差別をしない人間になろう」「差別をなくすために、自分のできることをしていこう」とそんな気持ちになつていました。そして、「今の僕にできることはないだろうか」と考えました。僕は、自分にできることの一つとして、過去の自分が体

と、僕に質問を投げかけてきました。こんな質問は何度も聞いてきたのですが、そのたびに心の中が悲しくなります。その時は相手の子に丁寧に説明したけれど、心の中では、「別に自分でなりたくてなったわけがうのに」と思っていました。

「なんで僕だけこんな思いせないかんの」「僕も指が5本の方がよかった」そう思つて複雑な気持ちになることは度々あります。でも、最近、もし5本の指に戻れても、今のままがいいと思うようになりました。その理由の一つは、もし指を5本にかえたとしたら、周りの友達から

「なんで指を5本にかえたん」

と聞かれるのが嫌だからです。体のことを僕だけなぜ説明しなければいけないのかと思うと嫌な気持ちになるからです。

二つ目の理由は、今戻れても、これからの生活に苦労することになるからです。僕には、今まで親や周りの人に支験したことを話すことに決めました。僕が手のことで感じた心の痛みは、差別やいじめを受けた人の心の痛みと同じだと思ふからです。この手があるからこそ、いろいろなことを深く考えることができたと思います。

僕は手のことで何度も大阪の病院に通いました。そこでいろいろな人に出会い、僕と似たような人がたくさんいることを知りました。また、世界中に、様々な差別を受けて苦しんでいる人もたくさんいると思います。一人で多くの人に差別について考えてもらい、差別をしたり偏見をもつてしまつたりする気持ちがなくなることが僕の願いです。

これからも僕の指の本数は変わらないし、いつも通りの暮らしをすることになります。今、ありのままの僕を受け入れてくれてる周りの仲間たちに僕はとても恵まれてることを改めて思いました。こんな周りの人たちとの関係を、これから先の僕の長い人生の中で、どこに行つても作っていきたいと思ひます。そして、僕を支えてくれてる周りの人たちの想いに応えていくことが、今の僕がやるべきことだと分かりました。そのために、自分にとって困難なことがあつても、やらずにあきらめるのではなく、まず努力していきます。そして、友達や先輩、先生、家族という、自分の周りの人たちを大切にしていきたいと思ひます。

ありのままを受け入れる社会

長崎県立長崎東中学校 三年
松尾果凜

「果凜ちゃんは、そのままが素敵だよ。」

これは小学生の頃、私の友達が私にかけてくれた言葉です。私は小さい頃に発達のは凸凹があると診断され、小学校で週一〜二回通級指導教室に通っていました。

特に感情のコントロールが苦手で、「負ける」「出来ない」という状況下では、心が悲しみでいっぱいになり、かんしゃくを起こしたり涙が止まらなくなったりしていました。一度その状態になると気持ちを切り替えることが難しく、一日中暗い気持ちで過ごすことも多かったです。

私は自分のそんなところが嫌いでした。かんしゃくを起こしている自分はまるで自分ではないような感覚もありました。生まれつきの特性とはいえ、友達にはただのわがままにしか映っていないかと思えます。周りから「わがまま」と言われるたびに、なぜ自分はこれほどに負けることを受け入れられないのか、気持ちの切り替えができないのか、嫌でたまらず、変えたいと思っていました。

する一般の人のコメントを読むと、発達障害の人に対して「迷惑」といった厳しいコメントが多く、とても胸が苦しくなります。多くの人は、発達障害は脳の障害であることを理解していても、共感したり受け入れたりすることは難しいようです。「わがまま」「振り回される」という言葉を見るたびに、見た目でわからない分、誤解されているように思います。

白い杖をついた視力に障害のある人や車椅子の人に対して、多くの人は親切に接することができません。その人たちが道端で困っていたら「助けない」と思う人が多数派で、「振り回される」と感じる人は少数派ではないでしょうか。でも発達障害の人には、「助けよう」「理解しよう」と思う人が少ないように思うのです。

見た目でわかりにくいということは、どう接すればよいかわ、どのように助けたらよいかわが伝わりにくいのだと思います。私は発達障害の人は、まず自分の得意なことや苦手なことを周りの人に知ってもらおう工夫が必要だと思えます。また、周りの人も自分の価値基準でその人を決めつけるのではなく、その人の生まれつきの特性によるものではないかと想像することが大切です。発達障害の人は周りに理解者がいれば、良いところを伸ばしていく力を持っているように感じるからです。

今でも私は負けず嫌いです。「人に負けたくない」という

あるとき私は失敗したことを同級生にからかわれ、泣きながら教室を飛び出してしまいました。そんなとき、私を追いかけてきてくれた友達がいました。彼女は泣いている私を見て、こんな言葉をかけてくれました。「果凜ちゃんは、悔しくて泣いちゃったんだよね。からかう人もいるけれど、果凜ちゃんはあるのままでいいんだよ。そのままが素敵だよ。」

私にとって目から鱗の言葉でした。私はずつと嫌だと思っていた特性を、彼女はありのままに受け入れてくれたのです。このときから私は少しずつ自分のことを受け入れられるようになり、徐々にかんしゃくを起こすことも減っていったように思います。

最近、学級崩壊に関する記事のなかで、発達障害の子どもが増えていることが原因として挙げられているのをよく見かけるようになりました。また、大人の発達障害についての記事もインターネットでよく目にします。記事に対して気持ちが目の前の課題に立ち向かう力になっています。私は他者のことを自分の価値基準で決めつけるのではなく、「この人は生まれつきこういう特性を持っているのかもしれない」と想像して接することのできる人になりたいと思います。あるとき、私を助けてくれたあの友達のように。